法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

勝連按司阿摩和利の名誉のために

川平, 朝申 / KABIRA, Choshin

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
49
(終了ページ / End Page)
63
(発行年 / Year)
1982-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002624

Hosei University Repository

勝連按司阿摩和利の名誉のために

川平朝申

長禄年間（一四五七年―一四六〇年）に彗星の如く現われた英雄勝連按司阿摩和利は、夏居敦大城賢勇の指揮する首里王府軍によって討伐され、逆賊無道の徒「屋良のアマンジャナー」の汚名を負わされたまま今日に語り伝えられて来た。

これは『毛氏由来記』『夏姓大宗由来記』をはじめ『中山世譜』『球陽』等、又沖縄伝統組踊『二童敵討』一名『護佐丸敵討』等で一方的に逆賊として記述されたものである。

ところが当時代に謡われた『おもろ双紙』の中に、「勝連按司阿摩和利」を讃えた、数節の「おもろ」があり、又、長禄年間の社会情勢を推察すると、必ずしも勝連按司阿摩和利が、中城城主護佐丸を討ち首里王府に謀叛する理由はない、故に逆賊ではなかった、と阿摩和利の名誉のためにペンを執ることにした。

Hosei University Repository

毛国鼎中城按司盛春（護佐丸）と勝連按司阿摩和利

護佐丸は『中山世譜』や『球陽』に述べられた通り、「賦性聡明にして勇武絶倫にして諸僚皆之を尊信した」という名将で、巴志北山攻略の際は羽地按司、名護按司、越来按司らと共に活躍した群雄の一人であり、尚巴志や尚泰久の忠臣と言う感覚では無かったであろう。

群雄割拠の時代であり、護佐丸にしても、チャンスさえあれば琉球を支配する程の人物であった。山田城主から読谷山に城を移し、読谷山按司（座喜味城主）時代は、大西(北)按司と呼び又、大西の特牛とも呼ばれた護佐丸を讃えた唯一の歌が、琉球伝統音楽の御前風(譜)「特牛節」の原歌であると言われている。

大西（北）の特牛や
なぢやぢらど好きゆる
我した若者や
花ど好きゆる

護佐丸を大西の特牛になぞらえて詠んだ歌である。

即ち、

大西の特牛（護佐丸様は）民草が好きである（人民が可愛いんだ……）
我々若者は花が好きなんだ（若い娘さんが好きであり可愛いんだ！）

この歌で読谷山按司護佐丸が間切の人民から親しまれ尊信されていた名将であったことが偲ばれる。

『中山世譜』には、護佐丸の姫が、尚巴志王の妃になった故に、座喜味城は首都首里から遠隔の地なる故に中城間切を陽い中城に築城させた、と記されているが、これは尚泰久王代との誤記にちがいないが、いずれにしても、護佐丸が中城按司に封じられ、中城城築城に際して、護佐丸特意の英知がしぼられた築城である。史書に伝えられる、「中山の王権を勝連按司阿摩和利から守るために、座喜味から中城に城を移した」と、考えるのは見当違いであろう。中城城の築城は、首里からの攻撃を予想しての構築で勝連からの攻撃には考慮されていない。東海岸の中城湾に面した丘陵の頂上東北東から西南西に一直線に連郭式に築かれた沖縄で最も新しい城である。

本門から入ると三の丸、二の丸、本丸と次第に高く広く堅牢な石畳で囲まれた小型の美しい城であるが、先に述べたように、この城は首里城からの攻撃を予想して築城されている事が明らかである。城壁西南の中腹に首里城に向けて二ヶ所の「狭間」（銃眼）がある。これは首里王府軍えの警戒と応戦

Hosei University Repository

の構えと考えてよろしい。

中城按司に栄転した毛国鼎護佐丸にとって勝連按司阿摩和利は別に恐れるほどの対手ではなかった。

護佐丸の姫が尚泰久王の妃となり、その姫(王女)百度踏揚が、勝連按司阿摩和利の妃となるので。中城按司護佐丸盛春にとって、国王尚泰久は婿であり、勝連按司阿摩和利は孫婿である故に、最も親近感のある身内である。

当時勝連按司阿摩和利の人気は絶頂にあった。そのことは当時謡われた次の「おもろ」が雄弁に語っている。

かつれんの、あまわり
とひやくさ、
ちよわれ
きもたかのあまわり
かつれんにせて、
きもたかとにせて

「勝連の阿摩和利よ、千代にましませ
すぐれたる阿摩和利よ、勝連に相応はしく治められよ。」

かつれんのあまわり
きこゑあまわりや
ぢやくにのとよみ
きもたかのあまわり

「勝連の阿摩和利よ、誉れ高き阿摩和利よ此の国の誇りであるよ、優れたる阿摩和利は」

かつれんは、てだ、むかて
ぢやうあけて、
まだま、こがね、よりやう
たまのみうち、
きむたかの、月むかて
かつれんは、けさむ、みやも

Hosei University Repository

あじゐらぶ

「勝連は太陽に向って門を建て、
真玉黄金寄合う玉の御殿ぞ、優れたる阿摩和利は月に向って、勝連は昔も今も名君を選び戴いている。」

又、

かつれんは、
なおにぎや、たとえる
やまとの、かまくらに、たとえる
きもたかは、なほにぎや

「勝連は何にたとえようか、大和の鎌倉にでもたとえようか、吾らの優れたる阿摩和利は何にたとえよう、」

又、

ももとふみあがりや
けさよりやまさて
ももちやらの
ぬしてだ、なりわちへ
きみのふみあがりや
しよりもりぐすく
まだまもりぐすく

「ももとふみあがり様は、以前からはるかに立派に百按司の主になられ、君のふみあがり様よ、首里森城、真玉森城」、

以上の数節の「おもろ」で、人間性豊かな勝連按司阿摩和利の人間像が髣髴とし、勝連城下の人民の平和な、いとなみと歓声が聞えて来るような感じがする。

特に阿摩和利の妃、百度踏揚按司を讃えた「おもろ」は、首里王府や中城按司にとっては唯ならぬ情勢を感じさせずにはおられなかったにちがいない。

Hosei University Repository

勝連城下の人民だけでなく、沖縄中の人民が、北谷間切屋良村の百姓から出世し、勝連按司になり、王女を妃に迎えた新進気鋭の勝連按司阿摩和利は流石に名にしおう天降り（阿摩和利）の君であり、百度踏揚按司も勝連按司の妃になりて、ますます輝やき立派になり、百按司の主君になられ、首里森城、真玉森城（首里城）の君になられよう。

これらの「おもろ双紙」に表現されている「勝連按司阿摩和利」は、天から降りて来た、救世主的な人物であり、その様な意味で「あまわり」と讃え呼ばれ「阿摩和利」の漢字を当てたのであろう。王女「百度踏揚」も、阿摩和利夫人になった故に一層輝きを増したよと讃美している。

「ももとふみあがりや
けさよりやまさて
ももとちやらの
ぬしてだ、なりわちへ
きみのふみあがりや
しよりもりぐすく
まだまもりぐすく」

この「おもろ」は解釈によっては「百度踏揚の夫君勝連按司阿摩和利こそは首里城主、中山王にも

のぼれるお方であるよ……」と、国民は等しく勝連按司阿摩和利を讃えていることを知った、尚泰久の逆鱗に触れ、勝連按司討伐の議がもちあがったのであろう。

もし阿摩和利に天下を支配するの野心があったとすれば、享徳三年（一四五四年）の尚金福王没後、王弟布里と世子志魯との王位継承の争乱の時にでも兵を起せば、天下の支配権を手中に収めることが可能であったことは、中城按司護佐丸や勝連按司阿摩和利にもよく知っていたであろうが、兵を起さずに居たことは、両按司とも、野心もなければ闘争も好まず、専ら人民のために奉仕をし、人民に親しまれ尊信された按司であったことが推察される。

中山王府（首里城）に系図座が設けられ、各家の系譜が公に記録されるようになったのは元禄二年（一六八九年）であり、沖縄の諱名と名乗が制定されたのが元禄四年（一六八一年）である。

（例えば「尚又は向氏」の諱名に名乗の頭文字を「朝」を付す、「毛氏」に「盛」又は「安」「夏氏」に「賢」「馬氏」に「良」を付す等）。

その時既に阿摩和利事件は伝説化し模糊としていたであろう故に『毛氏由来記』や『夏氏由来記』の記述に際しては何事の抵抗もなく、祖先、中城按司護佐丸を又鬼大城賢勇を武将忠臣として美化し顕彰することができたし又一方代弁者の無いのをよい事に勝連按司阿摩和利は、逆賊無道の輩として葬り去られたのである。

沖縄で修史が行われたのは、慶長元年（一六五〇年）向象賢羽地按司朝秀によって編纂された「中山

Hosei University Repository

世鑑」が最初とされており、その後、元禄十年（一六九七年）蔡鐸志多伯親方声亭によって執筆が始められ、同十四年（一七〇一年）に完成した『中山世譜』の第五巻に「毛国鼎中城按司盛春護佐丸」「勝連按司阿摩和利」、「夏居敦大城賢勇」「尚泰久王」らの争乱で勝連按司阿摩和利が「夏居敦大城賢勇」に逆賊として討伐される記事が詳細に記述されており、また鄭秉哲伊佐川親雲上佑實の編纂した『球陽』（一七四五年完成正巻二十二巻、附巻三巻）の中第二巻には、ほぼ同じ内容で「阿摩和利」討伐事件が記述されている。即ち「阿摩和利」を討取った、夏居敦大城賢勇は首里城に凱旋し、尚泰久王に復命すると、国王尚泰久は大いに喜び、その勲功として、越来間切の地頭に任じ、越来城主に封じた、となっている。

『中山世譜』や『球陽』の編纂が始められたころには、毛国鼎護佐丸盛春の子孫が繁栄し、首里王府の指導的地位にある人材が輩出していたので『毛氏由来記』や『夏氏大宗由来記』等と各家の系譜等も整備され、積極的に『中山世譜』や『球陽』の史料に提供されたのであろう。

当時護佐丸の子孫で、首里王府で政治、経済、文化教育のために貢献した人物は多く、尚貞王代の三司官（一六九四年―一六九九年）を勤めた毛光盛伊野波親方盛平をはじめ、同じく尚貞王、尚益王二代（一七〇二年―一七一二年）に三司官を勤めた、毛起龍識名親方盛命らに引つづき尚敬王代の三司官（一七一三年―一七一九年）に、毛応鳳勝連親方盛祐が活躍し、豊見城（毛氏）は、尚（向）氏、池城（毛氏）、小禄（馬氏）と共に、首里王府に於ける、政治全般の枢密顧問官的地位を確保していた故に、当然祖先

毛国鼎中城按司盛春護佐丸を忠臣とし、勝連按司阿摩和利を仇敵逆賊にしたのはいたし方ないことであった。

阿摩和利は、勝連按司として勝連、具志川地方のよき指導者であったことは疑いもないことである、かくも民衆から讃えられた、勝連按司阿摩和利であったから。

そのことが、首里王府にとっては大きな抵抗であったかもしれない。

然し、この「阿摩和利」を讃えた「おもろ」が、今日まで保存され伝えられたことは、勝連按司阿摩和利」を「きもたかのあまわり」たるを、証明する大きな助けになったことを嬉しく思う次第である。

かつれんのあまわり
きこえあまわりや
ぢやくにのとよみ
きもたかのあまわり

阿摩和利は不幸にも、その後裔に恵れなかった故に逆賊の汚名を負わされ哀れ独り地下に眠りつづけている。

Hosei University Repository

それに又、享保四年（一七一九年）尚敬王の冊封式典（戴冠式）に際して挙行される「御冠船踊」の踊奉行に日本芸能にも堪能な、向受祐玉城親雲上（後親方に昇進す）朝薫が任命された。

玉城親雲上朝薫は、冠船踊に新しい試みとして、舞いの外に、日本芸能の物を言う能劇のように、沖縄の故事来歴を、歌と台詞と舞いで、まとめた舞踊劇にし「組踊」と銘打って、「冠船踊り」の演目に加える事を考えた。

此の頃は日本文学が沖縄でも盛んに研究されていた時代であり、玉城朝薫が踊奉行に任命されたのは当然のことであったが、朝薫が組踊と言う、新しい沖縄の劇文学とも言うべき「組踊」を創作するに日本文学の研究者の先輩に毛起龍、識名親方、盛命に『毛氏由来記』をテーマに貰い、いろいろと指導を受けており、その外にも、伝説や伝記を収集し遂に玉城親雲上朝薫は、苦心のすえ五組の「組踊」を創作し御冠船踊りとして上演することになり、その一つが『護佐丸敵討』一名『二童敵討』と言う、「勝連按司阿摩和利」を仇敵として仇を討つと言う物語を、日本の能劇「夜討曽我」と同じ仇討ち物ではあるが、物語りの内容は全く違う、玉城親雲上朝薫は「護佐丸と阿摩和利」は実在するが、護佐丸の遺児は実際は一人であり、二童はフイクションである年令も合わない、その一人の遺児から先に述べた人材の中に、時の三司官毛応鳳勝連親方盛祐もその一人である。

それ故に玉城親雲上朝薫によって初めて上演される、「組踊」の中に祖先が生き生きと動き語るのを目のあたりに見るのは感激であったに違いない。

だが勝連按司阿摩和利にとっては、此の役では奸雄となり、悪逆無道として演出されており、勝連按司阿摩和利にとって極めて迷惑なことだが、しばらく黙して、玉城朝薫の組踊『護佐丸敵討』の主役として、阿摩和利の名台詞（詞）を聞いて貰いたい。

あまおへ―詞―。

出様ちやる者や
屋良のあまんぎやな
勝連のあまおへ。
あゝ、天の雨風や
絶ゆるとも、
人の望み事絶らぬ
此の世界の習や。
あゝにやや
首里ほろぼすば、
此の天の下や、
我自由しち遊で、

Hosei University Repository

浮世暮らさ。
道ざわりしゆたる
護佐丸も殺ち、
なし子苅捨て、
すで子苅捨て、
肝ざわり無らぬ、
道ざわり無らぬ。
よかる日よえらで、
まさる日よえらで、
首里いくさすらに、
那覇いくさすらに。
今日明る廿日、
今日明る卅日、
よかる日よりやこと、
まさる日よりやこと、
野原出て遊ば、

願たてて遊ば。
供のちや〳〵。

以上で「あまうい」の悪逆無道な振りを、全肢体と七目付けと言う演技で、阿摩和利の悪逆ぶりを徹底的に表現する、名組踊である。

屋良の「あまおり」が朝薫の組踊『護佐丸敵討』の中に主役として、天下を手中に入れんばかりの偉刀と、特異な演技七目付け、二童の可憐な舞いに魅せられ、最も大切な大刀をはじめ、羽織、衣類をぬぎ与えた後に二童に討たれる、童心豊かな「おまおい」にした、玉城朝薫は、勝連按司阿摩和利を、おもろ双紙の阿摩和利を認識していたに違いないが玉城親雲上朝薫躍奉行任命当時、冊封式典の三司官が護佐丸の孫子である勝連親方盛祐であったから、阿摩和利を、あの様に演出せざるを得なかったことと思われる。

勝連按司阿摩和利は最早や伝説の人物になっているが、日下勝連城は復元をつづけている、鎌倉にたとえられた、勝連が再び！

きもたかのあまわりを、
かつれんのあまわりを、正しく証する日が来るであろう。